

対談シリーズ 7 第92回日本泌尿器科学会総会

奥山 明彦

(大阪大学教授 第92回日本泌尿器科学会会長)

小川 修

(京都大学教授 泌尿器科紀要編集委員長)

小川：2004年春には国立大学の独立行政法人化や卒後臨床研修必修化というような今までにない大きな改革が予定されていますが、今日はその2004年に泌尿器科学会総会を主催される奥山先生をお招きしお話を聞きます。まず総会のメインテーマから聞かせていただきたいのですが。

奥山：メインテーマは『地域に生き、世界に伸びる—Live locally, Grow globally』というのをメインテーマにしています。簡単にいえば、地域医療と日本全体や海外のグローバルな医学、医療を両輪として発展させるということになります。われわれは在宅医療というような身近な問題をもっと真剣に考えることが必要でしょうし、すでに薬効がわかって市販されているお薬を使う場合でも、医師自身でしっかり検証することの重要性も強調すべきでしょう。先進医療、先端医学とは、身近なものから飛躍すべきものだと思っています。また、ローカルとグローバルという言葉も、すこし視点を変えることによっていろいろな見方ができると思います。広い視野に立つという意味をこめて、あえて泌尿器科という言葉を用いませんでした。

小川：いまは高度の技術や高額な器機を使った先進医療、先端医学がもてはやされています。しかし、本当にこれらの高度な医療技術によって現実をふまえた患者中心の医療・医学が出来るのか、ただの絵空事になってしまうのではないかと、という不安は確かにあります。実際に私たちはそれぞれの地域で患者さんとともに活動しているわけなので、しっかりと足場を固めておいて、それからグローバルに飛躍するという意味でしょうか。

奥山：現場での医療をひとつひとつしっかりやって、その上でさらに海外にも発展しようということでもあります。

小川：そのメインテーマのもとでいろいろ企画をされたと思いますが、何か特に工夫された点はどこでしょうか。

奥山：総合企画ですね。私が前から思っていましたのは、シンポジウムやパネルディスカッションはサブスペシャリティーの限られた分野の紹介には役立つ発表形式ですが、それでサブスペシャリティーのすべてが理解出来るわけではないということです。課題とな



るテーマの背景から始まって、これまでの経緯、現状、そして今後の展望などを効率よく系統的に聞けば、最初は白紙の状態でも「ああ、こういうものなのだ。」と理解出来るのではないかと思います。身近な問題から先端のものまで広い範囲で10テーマほど取り上げています。

また、第一線病院の勤務医や開業しておられる先生方が参加しやすいように日程も工夫しました。開業していらっしゃる方も参加出来るようにということで、土曜日と日曜日を期間に加え、直接役立つような企画を出来るだけたくさん予定するようにしました。そして平日の月曜日と火曜日は、どちらかと言えば大学病院や中核病院の先生方を対象にした内容となるようにしています。

それから多くの先生方にシンポジストやパネリストをお願いしています。ちょっと詰め込みすぎたかなというところもあるのですが、テーマについて出来るだけ簡潔に各先生方にお話しいただきます。現況を短時間で理解していただきたいと思います。泌尿器科学会はサブスペシャリティーの学会ではありませんので、各講演者の発表時間をやや短くしてより多くの情報が参加者に発信出来るよう工夫をしています。

小川：今回の泌尿器科学会総会の大きな特徴のひとつは、効率的で質の高い情報発信というところにあるのですね。

ところで、教育に関するご配慮はどのように考えられましたか。

奥山：教育的配慮は総会の大きな課題ですね。この視点から Young Urologist Research Workshop を企画



しています。これは30代の若手を中心としたワークショップで、優秀な若い方に発表する機会を持っていたかどうかという目的で企画しました。

小川：なるほど、すばらしい企画ですね。

奥山：最初は30～40題くらいの応募を予想していたのですが、80題も応募をいただいたんです。結局、50題くらいをアクセプトしました。各領域別にいくつかセッションを組んで各セッションに外国人のコメントーターを入れました。ラウンドテーブル形式で、すべて英語で発表とディスカッションをするように考えています。具体的なことは世話人と司会の先生方にすべてお委せています。最初私もミーティングに参加したのですが、そのあとは世話人の方に企画と運営をお願いしています。教授は入室禁止です、というのは冗談ですが、このなかで日本の泌尿器科の基礎医学、基礎研究が今何をやっていてこれからどういう方向に行くのかを知りたいと考えています。

それから、多くの外国人の先生方に講師として来て頂くように企画しました。欧米から約20人、アジアから約30人を予定しています。特にアジアの先生方を対象としたワークショップをやる企画もあり、各国での課題を発表いただくように考えています。

小川：「アジアの中の日本」という意識がこれからは大切だと先生は考えておられるということですね。

奥山：現実には経済格差があったりして、そう簡単にはいけないと思いますが、アジア重視の姿勢が学会としては必要でしょう。

小川：一般演題に関してはいかがですか。

奥山：いただいた一般演題は1,055題で、オーラルが336題、ポスターが659題、ビデオが60題です。多様な価値観の時代ですから、出来るだけ内容に透明性を持たせることが大切だと思っています。演題募集の中にも刷り込んだのですが、今度の発表にあたっては、医師や科学者としてのモラルや患者さんの人権に充分配慮していただきたいと思っています。日本で未承認の薬剤、医療機器を研究目的で使って行われている場合は、当該施設の倫理委員会や治験統括医師の承認を得た上で発表してほしいと思っています。



小川：今回の総会のテーマや先生が考えておられる今後の方向性がよくわかりました。

それでは、この機会に、ちょうどこの4月から始まる大きな制度改革に関して、特に卒後臨床研修の必修化と泌尿器科専門医制度についてお聞きしたいと思います。この制度改革をきっかけに大学病院も大きく変わらざるを得ないと思いますが、いかがでしょう。

奥山：大変な時代ですね。私の個人的な見解ですが、大阪地区は比較的良い方向で動いているのではないかと思います。内容の充実した研修指定病院が集中しているということや専門病院間で病院群を作りやすいこともあって、大阪府全体での研修予定者は最初思っていたよりも多いようです。

小川：それと国立大学は独立行政法人になって、経済的な面で強いプレッシャーがかかってくると思うのです。それと同時に研修医がいなくなります。その研修医不在という状況下において、マンパワーをどのように確保しようとされているのでしょうか。経済性を優先させると安全性が問題になります。特に高度先進医療を行っている大学病院では厳しい状況です。また、これまで大学教官が責任をとってきた研究と教育とのバランスなど、さまざまな問題が出てくると思います。

奥山：この2年間は研修医が来ませんね。大阪大学には非常勤医員という制度があります。大学院にこれから入られる方とか、あるいは卒業されてもうしばらく大学院に残っておられる方とか、そういう方を医員として相応の給料を支払って診療に従事していただくというシステムがあるんです。

小川：この2年間は緊急避難的にそういう制度を活用して何とか乗り越えようということですね。ただ、研修医の給料など、この制度に関わりのある人の処遇がはっきり決まっていないですね。

それと泌尿器科専門医教育ですが、今までははじめから泌尿器科医として研修を開始して、その中に基本的な初期研修を組み込んできたわけですが、これからは2年のローテート教育を終わってから専門医教育を受けることになります。これに関してはいかがです

か。

奥山：先生がおっしゃるのは、これまでは5年間でやっていたものを3年でしなくてはいけないということでしょうか。確かにもう少しオリティーというか濃密度というか、研修のあり方を考えなくてはいけないと思います

小川：2002年の教育セミナーのアンケートから勉強させてもらったのですが、泌尿器科の専門家としての知識量というのは今のトータル5年で充分獲得出来ると会員の皆さんは思っておられるのです。しかし、一方で技術面に関する不安というものを強く持っておられます。ですから「専門医教育は初期研修2年に加え3年で十分ですか。」と聞くと、やはり「4～5年は必要。」という先生方が多い。特に手術のような専門的手技の修得は、アメリカのように症例を集中させて教育するというシステムではありませんから、何とか工夫する必要があると思います

奥山：腹腔鏡下手術の事件があって、「専門医といっ

てもいい加減なものじゃないか。」という目で社会から見られている可能性がありますね。外科学会はかなり厳しい専門医制度をスタートしていますので、外科学会を参考に少し考えてみる必要があるかもしれません。同じ外科系のサブスペシャリティーの学会の動向などもよく見て、それより突出する必要はないとしても、肩を並べておくということが必要だと思います。しかし、専門医としての自覚は、最終的には個人が持たなければいけないですね。学会がしっかり専門医の条件や試験の敷居を上げて、誰でも通すようなものではなくて実質の伴ったものにしていく必要があるのではと思っています。最近はこの考えもかなり増えているのではないのでしょうか。

小川：良い方向でこの大きな制度改革が進んでいってほしいですね。先生、本日は貴重なお時間をいただき本当にありがとうございました。日本泌尿器科学会総会の成功を心からお祈り申し上げます